

興福寺旧境内の調査

—第465次・第467次

1 第465次調査

はじめに

奈良県庁前のバス停設置にともなう事前の発掘調査である。調査区は、東区・西区（大宮通りの北側）、南区（大宮通りの南側）の3ヵ所に分かれる。東区・西区は寿福院の南辺に、南区は興福寺中心伽藍北方の境界域にある。調査面積は、東区が約10m²、西区が約13m²、南区が約20m²、合計43m²である。調査期間は、東区・西区が2009年12月8日から12月15日まで、南区が2010年1月13日から1月29日まで。

東区では、地表下110cm前後で中世の包含層を検出し、一部で包含層の下に粘土層が厚く堆積することを確認した。西区では埋設管が検出されたため、そこで掘削を停止し、一部で中世の包含層とその上に堆積する焼土層（江戸時代か）を検出した。東区・西区いずれも顕著な遺構は認められなかった。

以下では、南区の調査成果について述べる。

基本層序

上から近・現代の造成土（厚さ約65cm）、茶褐色土（約60cm）、灰褐色土（約40cm）、黒褐色土（約10cm）、灰黄褐色土（約25cm）、黄褐色土（地山）の順である。



図229 第465次・467次調査区位置図 1:6000

灰褐色土は瓦を多く含むが、特に上から約10cmの範囲には大量の瓦が堆積し（図230）、炭化物・焼土も多く混じる。調査区全体に広がるため包含層と判断したが、遺構の可能性もある。瓦の年代は、鎌倉時代とみられる。

遺構検出は、①灰褐色土上部の瓦堆積を取り除いた面・②黒褐色土上面・③灰黄褐色土上面でおこなった。①②では、顕著な遺構は認められなかった。③では、東西溝1条を検出した。また、調査区西北隅の拡張時に、土坑1基（近世の廃棄土坑か）を検出した。

検出遺構

SD9460 東西方向の素掘溝。北肩のみを長さ約4.5m分検出した。幅60cm以上、検出面からの深さ約10cm。さらに調査区外の東西に延びる。埋土からは、奈良時代の須恵器片・平安時代の軒平瓦が出土している。

SX9463 調査区西壁の土層断面で、SD9460の北側に検出した掘込地業。地山を約20cm削り込み、人頭大の石を入れて埋め戻している。南端から1.2m分が確認でき、北はさらに調査区外に続く。上層には、築地塀が存在した可能性がある。



図230 灰褐色土上面瓦堆積（東から）

表36 第465次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦	軒平瓦	その他			
型式	点数	型式	点数	種類	点数
興306（鎌倉）	1	興636?（平安）	1	平瓦（刻印）	1
興307（鎌倉）	1	興696（不明）	1	道具瓦	2
巴（鎌倉後期～室町前期）	1	興908（鎌倉）	5	伏間瓦	1
巴（室町前半）	1	平安	4	土管	1
巴（近世前半）	1	鎌倉	4		
巴（近世後半）	2	室町後半	1		
鎌倉	4	中世	1		
近世後半～近代	1	近世後半	1		
型式不明	1				
軒丸瓦計	13	軒平瓦計	18	その他計	5
丸瓦		平瓦		凝灰岩	
重量 点数	136.801kg 546	451.053kg 2627	0	0	0

出土遺物

土器 3調査区全体で、整理箱4箱分の土器が出土した。南区からの出土は3箱分で、多くは小片である。黒褐色土から比較的まとまった量が出土しており、年代は13世紀代とみられる。

瓦磚類 一覧を表36に掲げた。ほとんどが南区からの出土である。

まとめ

本調査区の東約150mに位置する立会2009-7次調査区では、1986年の第174-7次調査で検出した東西方向の築地塀SA9465とその北側溝SD9466を再検出している。SD9466は、埋土に含まれる土器の年代観から、12世紀末～13世紀前半には埋没したとみられる（『紀要2010』）。またSA9465の築造は鎌倉時代以前で、奈良時代まで遡りうると推定される（『昭61平城概報』）。

今回検出した東西溝SD9460は、ちょうどSD9466の西延長上に位置し、並存していた可能性もある。しかし、掘込地業SX9463が築地塀にともなうものとすれば、SD9460は築地塀の南側に位置することになり、SD9466が築地塀の北側に位置するのとは異なる。SD9460とSD9466の関係は明確ではなく、その解明は今後の課題である。

また、立会2009-7次調査では、SD9466の埋土の上に中世以降の路面とみられる硬質な土層を確認しているが、今回の調査区では確認できなかった。

本調査の成果は、古代から中世にかけての興福寺中心伽藍北方の区画の様相について、一つの検討素材を提供するものといえよう。周辺調査の進展に俟ちたい。

（桑田訓也）

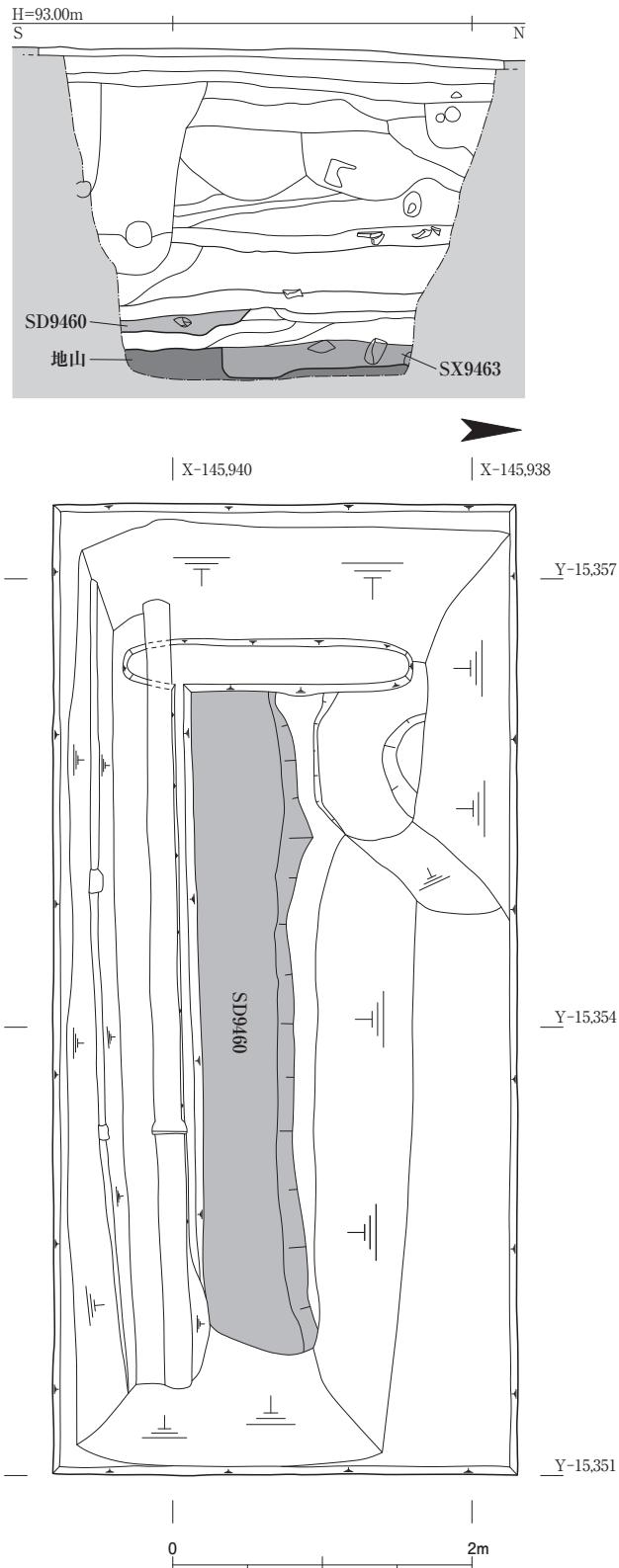


図231 第465次調査南区遺構平面図・断面図 1:50

2 第467次調査

調査経緯

調査地は東向北商店街の入り口で、平城京の条坊では左京三条六坊十五坪の西南隅部、興福寺旧境内に位置する。店舗付住宅の新築工事にともなう事前の発掘調査で、平城第467次調査にあたる。

調査区は南北3.5m、東西8mの計28m²の範囲を設定した。調査は2010年2月2日に着手し、2月17日に埋め戻しを完了した。

基本層序

基本層序は調査区の東半と西半で異なり、東半では地表から造成盛土、黄色粘質土（整地土）の順で青灰橙色粘質土の地山に至る。西半では低地を平坦にするための整地土を確認し、地表から造成盛土、黄褐色粘質土（整地土）、灰色砂礫土（包含層）、黄色粘質土（整地土）、灰褐色粘質土（整地土）の順で地山に至る。検出は黄色粘質土層、灰褐色粘質土層、地山の上面の3面でおこなった。

検出遺構

調査区東半では黄色粘質土層の上面で、南北溝SD9447、SD9448、土坑SK9449を検出した。

SD9447 幅約1.1m、深さ約20cmの素掘溝で、約2.4m分検出した。

SD9448 幅約1.0m、深さ約10cmの素掘溝で、約2.8m分検出した。

SK9449 幅約1.1m、深さ約30cmの土坑。

調査区の西半では、黄色粘質土層の上面で、土坑2基（SK9445、SK9446）を検出した。いずれの遺構も性格は不明。また、地山面ではトレーニング西端で南北溝SD9450を検出した。

SD9450 幅約50cm、深さ約20cmの素掘溝で、2.4m分検出し、出土遺物から奈良時代から平安時代にかけての遺構とみられる。

（海野聰）

出土遺物

顕著な出土遺物として、乾元大寶がある。右下3分の2程度折損している。直径1.94cm、厚さ0.16cmで重さが1.8g。大きさの割に軽い。錢面は擦り減っているが、かろうじて文字が読み取れる。天徳2年（958）初鑄とされる12番目の皇朝十二錢である。

（国武貞克）

おわりに

本調査区北方の第439次調査において、東六坊大路西側溝とみられるSD9300を検出しており（『紀要2009』）、SD9300はSD9450よりも約15m東に位置する。東六坊大路については、計画よりも実際には西へよせて建設したとする説が提示されており¹⁾、今回検出したSD9450が東六坊大路側溝である可能性もある。ただし、第439次調査および今回調査の調査範囲はともに非常に限定的であるため、その判断は困難であり、今後の周辺の発掘成果を待ちたい。

（海野）

注

- 1) 西崎卓哉「平城京外京の地割計画寸法」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1985』奈良市教育委員会、1986。

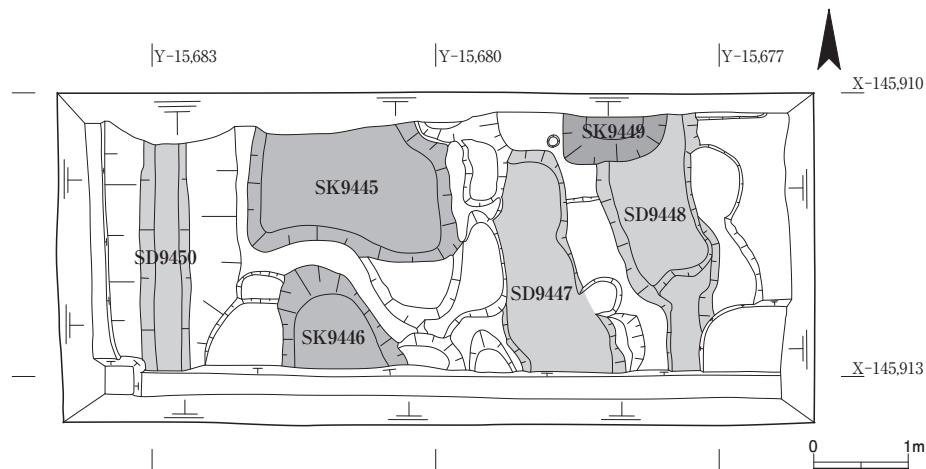


図232 第467次調査遺構平面図 1:80